

ヒトはなぜ自由選択場面を好むのか

—選択肢の提示数の観点から—

Why humans prefer free-choice: From the viewpoint of the number of presented alternatives

○堀麻佑子¹・嶋崎恒雄²¹関西学院大学文学研究科・²関西学院大学文学部)

Mayuko HORI and Tsuneo SHIMAZAKI

¹Graduate School of Humanities, Kwansai Gakuin University, ²School of Humanities, Kwansai Gakuin University)

Key words: choice behavior, forced-choice and free-choice, concurrent-chains schedule

実験的行動分析の一領域として、選択場面間の選択についての検討が行われている。選択場面間の選択事態では主に、選択肢が一つしか提示されない強制選択場面と、選択肢が複数提示される自由選択場面間の選好について実証的な検討がなされており、それらの研究の多くで自由選択場面に対する選好がみられてきた (Catania, 1975, 1980; Suzuki, 1997)。

たとえば、堀・嶋崎 (2009) はヒトを対象として強制と自由選択場面間の選好の検討を行った。その結果、自由選択場面に含まれる選択肢の一つが、相対的に報酬が少ない選択肢である条件においても自由選択場面に対する選好がみられた。つまり、終環における選択肢は単に刺激として提示されるだけでも、自由選択場面への選好を高める可能性が示唆された。しかし、堀・嶋崎 (2009) では、自由選択場面に含まれる選択肢数を2つから3つに増やしたとしても、自由選択場面への選好に顕著な差はみられなかった。この結果から、自由選択場面への選好を規定する要因が「選択肢の提示数」だけではないことが示唆された。

本研究の目的は、「選択肢の提示数」のみが自由選択場面への選好に関与しているか否かを明らかにすることであった。具体的には、終環における選択の可否を「選択可能性」の有無として定義し、選択可能性が有る場合 (実験1) と無い場合 (実験2) の2つの状況下において、「選択肢の提示数」の効果の検討を行った。なお、選択可能性が有ることを、実験参加者が終環においてカードを選択できることと定義した。また、選択可能性が無いことを、実験参加者が終環においてカードを選択できず、コンピューターによって選択が自動的に行われることと定義した。本研究の結果から、自由選択場面への選好という現象が、単に選択肢としての刺激が提示されるだけで生じるのか、または、選択可能性が担保された状況下でのみ生じるのかが明らかとなる。

方法

[実験参加者] 大学生36名 (男性18名、女性18名)。平均年齢は20.6歳 (18歳から23歳)。実験参加者は無作為に実験1と実験2に割り当てられた。

[実験課題] 実験課題は並立連鎖スケジュールによって制御された。ディスプレイ上に提示された色つきカードが選択肢として設定された。実験1と実験2では、終環におけるカードの選択の方法が異なっていた。

初環において、実験参加者は2つの選択場面間の選択を求められ、場面選択ボタンに一回反応すると、終環に移行した。終環では、初環の選択に応じて2枚、もしくは3枚のカードが提示された。提示されるカードは、色によって与えられるポイントが弁別可能であった (Table 1)。実験1では、実験参加者は終環でカードの選択を求められ、1枚のカードの上で一回反応するとポイントが提示された。実験2では、実験参加者は終環で

カードを選択することは出来ず、コンピューターがカードを選択した。選択されたカードの上部には矢印が提示され、選択されなかったカードは灰色に色に変化した。また、このときカードは無作為に選択された。その後、ポイントが提示された。ポイントは、両実験において40%の確率で提示された。

[手続き] 実験参加者は実験課題開始前に、実験課題の主旨はなるべく多くのポイントを稼ぐことであり、実験終了後は5ポイント1円で換金されることを教示された。初環からポイント提示までを1試行とし、1条件ごとに40試行を行い、3条件が終了した時点で実験課題が終了した。条件の施行順序は実験参加者間で平衡された。

結果および考察

Figure 1には、各実験における選択肢の提示数が3つの場面の初環での平均選択率を示している。左列には実験1を、右列には実験2を、それぞれ示している。実験1では、3条件すべての条件において、選択肢の提示数が3つの場面 (3A-C 場面) に対して、選好がみられた。実験2では、Irrational条件とEqual条件では選好はみられなかったが、Rational条件では3A-UC場面に對して選好がみられた。Irrational条件とRational条件の結果は、ポイントの期待値に従った選好がみられたことを示唆している。

これらの結果から、終環において選択可能性が無い場合には選択肢の提示数は自由選択場面への選好を高める効果をもたないことが示された。この事実は、ヒトが自由選択場面を選好するという現象は、単に選択肢としての刺激が提示されるだけでは生じず、選択可能性が担保されることが必要であることを示唆している。

Table 1

Condition	Experimental Design (Exp.1, Exp.2)					
	Terminal Link					
	2A-C/2A-UC		3A-C/3A-UC			
Irrational	G (10)	P (5)	G (10)	P (5)	B (1)	
Equal	G (10)	G (10)	G (10)	G (10)	G (10)	
Rational	G (10)	Y (15)	G (10)	Y (15)	R (20)	

Note. The details of three conditions. Letters represent color of cards. G, B, R, P, and Y indicate green, blue, red, purple, and yellow card respectively. Numerals represent point of value of cards. 2A-C represent '2 alternatives and choosable situation'.

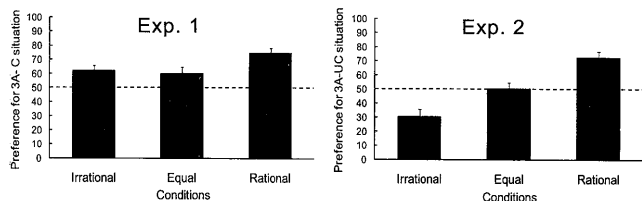


Figure 1. Preference for the situation that three alternatives presented in the IL. The broken line represents a chance level. Error bars represent the standard error of mean.